
ごめんな、神様

水城由羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ごめんな、神様

【Nコード】

N0608E

【作者名】

水城由羅

【あらすじ】

子供の頃姉弟ながら好きあっていた南と北斗。だがある時南は死んでしまい・・・それから15年北斗には東、西也という弟ができた家族5人で暮らしていた。そんなとき東のクラスに転校生がきて

前編

ごめんな、神様。

「南ちゃん、僕南ちゃんが大好きだよ。大きくなったらボクと結婚しようね」

「うん、アタシも北斗が大好きだよ」

そう言つて未来を誓い合つた十五年前。南は俺の一つ上のきちんと血の繋がつた姉だった。

頭の良かった姉さん。

文学的で美少女と呼ばれる人だった。

俺はそんな姉さんが本当に大好きで、兄弟以上の感情を持っていた。姉さんも同じ思いを持つていてくれていたけど、頭の良かった姉さんは6歳にして禁忌の恋愛に気付いていたんだろう。俺と接する時は一生懸命隠してはいたが辛そうな顔をしていた。

それに気付いたのは俺がもう少し大きくなってからだった。

そして、その将来の誓いを立てた次の日、姉さんは死んだ。

交通事故だった。姉さんは青信号を渡つていたのにそこに車が突っ込んできた。

姉さんは綺麗だった。打ち所が悪かつただけらしい。姉さんと一緒に寝る前に読んでもらつていた白雪姫や眠り姫のように王子様の口付けで目覚めるんじゃないかと思つた。

でも、現実に生き返るなんてありえない。5歳ではあつたけど俺はわかつていたんだ。

神様は俺たちの恋に怒り裁きを下したんだと思つた。葬式の間中泣いている両親を見て俺たちはしてはいけないことをしていたんだと幼いながらにやっと気付いた。

俺は泣かなかつた。いや、泣けなかつた。涙一粒でなかつた。

姉さんが白い煙とともに空に昇つてしまつても、もう会えないって

心の中で思っても泣けなかったんだ。

俺のせいだから、俺が泣くなんて許さされない。俺が姉さんの未来を奪ってしまった。俺が両親から大事な姉さんを奪ってしまった。俺が姉さんを好きになりさえしなければ。

両親が泣くことも姉さんがこの世からいなくなることもなかったんだ。

それから15年泣いてはいない。

姉さんが死んでからまもなく弟が生まれた。その2年後にもう一人また弟が生まれた。

この弟二人は写真でしか姉さんを知らないんだ。

俺がこの二人から姉さんという存在を奪ってしまったんだよな。ごめんな、二人とも。

父さん、母さん、姉さん、神様、ごめんなさい…。

そして、十五年、俺の気付かないところで歯車が回り始めていた。ゆっくりと止まっていた歯車がかみ合い始める。

二十歳になった俺は大学に通いながらコンビニのバイトをやっていた。

弟が二人いて学費とか両親に迷惑かけないようにするためにバイトして学費を稼いでいた。

俺が姉さんを奪ってしまったから。俺は両親にも弟達に対しても罪滅ぼしをするように十五年間全てに対して一生懸命だった。

俺が一生かけて四人にしなけりゃいけない償い。

すぐ下の弟・東は高校一年生になりサッカーに精を出していたし、末っ子の西也は顔も性格も姉さんに似て文学少年になっていた。

「今日、転校生来たんだ」

夕飯の席で東が楽しそうに言った。

東の横には母さんが座り、向かい側には西也と父さん。俺はその間に座りその向かい側には空席になっている椅子。十五年間ずっと…

「おい、兄貴聞いてるか？」

東の怒ったような一言で我に返る。

「え、ああ、ごめんどうしたって？」

「だから、東兄さんの所に転校生が来たんだって」

「へえ……」

「美人な子なんだけど……どつかで見たことあるんだよな。あの子もオレと会った時に懐かしい人でも見るような目で見てたんだ。」

「で、東兄さんはその転校生に一目ぼれしたと」

飄々と微笑みながら告げる西也に東が「そんなじゃねー」と叫んだ。

「ただ……懐かしい気がしたんだ。しかもなんつーか兄貴と似た感じの雰囲気を感じた」

俺と似た感じ？それはどういふことなんだろう。

数日後、午前授業だった俺は家に帰りつくなり眠気に誘われベッドに倒れこんだ。こんなことめったにないのに。だんだん意識が遠くなる中で懐かしい夢を見た。

十五年前の夢。俺と姉さんが二人で公園で遊んでいた。

「南ちゃん」

決して離れないように力強く手を握った。姉さんはふわりと笑う。

「北斗。もうすぐ、また会えるから」

そう言つて姉さんは俺の手をするりと抜け消えた。そこでハッと目を覚ました。

「……姉さん」

目の前にあるのは見慣れた天井。姉さんが目の前にいるわけがないのに。

馬鹿みたいだと思い頭を軽く掻く。寝ぼけた頭を覚ますために水を飲もうと下に向かった。姉さんの夢なんて久しぶりだ。

姉さんが死んですぐはよく見ていたけどいつの頃からか見なくなつた。

姉さんのことは片時も忘れたことなんてなかったのに見なかったというより出てこなくなつたんだ。それなのになんで今更。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0608e/>

ごめんな、神様

2010年10月27日23時59分発行